

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ <http://shakaisushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649 FAX(03)329915367
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 (郵送) 350円・メール 175円

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

向坂先生を偲ぶ

早田 昌二郎……2

当面の、そして長期的な人口問題への対処について

中澤 秀行……4

—人口問題 根本解決への基本視点(三)—

◇ドイツND紙の記事 原八峰訳からの紹介(下)◇
ピケティは何が資本主義かを問わない
彼は何を成し遂げたか、そして何を成し遂げなかったか

……7

仲間を支える態勢、そして覚悟

……10

—「福本裁判」の教訓—

読者からのおたより……11

旬刊 社会通信

NO. 1185

二〇一五年二月一日号

二〇一五年二月一日発行
(毎月一日・十五日二回発行)

向坂先生を偲ぶ

この一月二十二日、一九八五年に先生が八十七歳で亡くなられて三十年目になる。

一九八五年は、八一年三月に土光敏夫会長以下九名で発足した第二臨調が、七月末には専門委員、顧問、参与などを加えた一〇〇名近い陣容となり、瀬島龍三臨調委員（伊藤忠商事相談役）の事務所は「裏臨調」といわれ、年末からマスクミを総動員したような「ヤミ」「カラ」攻撃が、国鉄労使⇨国賊論から「職場総点検」で国鉄労働者の権利破壊へと誘導され、国鉄を「分割、民営化する」基本答申（八二年七月）の後、鈴木善幸首相の辞意表明（10月12日）、「国鉄再建監理委員会」設置の閣議決定（11月19日）、26日の中曽根康弘内閣の発足と、キナ臭くなった時である。

具体的には、八五年の一月十日には、国鉄が独自の再提案⇨経営改革のための基本方策を政府に提出、国鉄側とは議論したくない臨調側は中曽根をして、国鉄総裁更迭事件（6月24日）を起させ、縄田国鉄副総裁以下「分割民営慎重派」を抹殺、世間は中曽根の手法に驚愕した。今でいう「テロ」である。中曽根や運輸省・財界などの臨調側は、素人集団であり、国鉄側とは対等に議論できないことを自覚していたための謀略である。したがって、分割・民営化後のJRは、国鉄時代にはありえないような事故や惨事、例えば、第三セクター信楽高原鉄道内でのJRの急行と高原鉄道列車の正面衝突事故（91年5月14日、死者42人、負傷者576人）や尼崎列車脱線転覆事故（05年4月25日、死者107人+1名、重軽傷549人）であり、東海道新幹線の乗客（高校生）頭部轢断死亡事故（95年12月27日、三島駅新幹線下りホーム）等々の事故・惨事の続発であり、首都圏の国電も運転支障・事故を続発中であり、JR東日本の水尻棒事件も同質の体質が生んだものと思われる。

第二臨調が発足した八一年の七月に先生は、国鉄反合理化研究会の機関誌「理論と実践」第三号に、『過ちを再び犯すなかれ！』という檄文をお寄せ下さっていた。

それは、「あの食料に悩んだ第二次世界大戦、ヒトラーに指導されてやった日本国民の敗戦を、今度はアメリカにつられてまたやろうとしているとは、なんとという愚かなことであろうか？」という書き出しのエッセイである。

先生は、その一文で、東ドイツで出版された『ファシズム研究』に敬意を表しつつ、昭和八年四月十日発行の『前進』の記事を引用してヒトラーの狂気振りを紹介、「われわれが記憶しなければならぬことは、この歴史上最悪の戦争に日本も加担したという事実である。この史上最悪の事件を再びしてはならない。わが国には、ファシショの条件は、残念ながら全部そろっている。まず、独占資本が支配している。軍隊がある。しかし社会党は、『非武装中立』を旗印の一つとしている。」と述べて『非武装中立論』（石橋政嗣著）の重要性を強調し、「しかしこんどは、ファシストを出してはならない。わが国は言論の自由を保持する国でなければならぬ。第二次世界大戦はどうして起こったかを深思する国でなければならない。吾国をして、言論の自由を保持

する国たらしめよ。わが国にファシズムの条件は完全にそなわっている。これをファシズムに転化するなかれ！ 最も注意すべきは軍備である。この軍備のためにわれわれは、財政上の負担を背負わされ、生命（いのち）をちりあくたの如くすてさせられてはならない。

日本国民はこれをまじめになつて考えねばならない。」と、結んでいた。

「アベノミクス」なる勝手な造語をかざして再登壇した安倍内閣は、きわめて危険な方向に日本を誘導しようとしている。二〇〇六年八月に登場した安倍内閣（〇7年9月）は、「戦後レジームからの脱却」を掲げた通り、第二次大戦の敗戦がもたらしたわが国の平和と民主主義をぶつ壊すことに着手、教育基本法（改悪）と防衛庁の省昇格法を成立（06年12月15日）させ、翌年、国民投票法と学校教育法（教育改革関連三法）の改悪を強行した。しかし、閣僚の不祥事等で退陣した。

第45回総選挙で圧倒的支持を得たのは鳩山民主党だったが、鳩山・小沢のセット退陣後の民主党はメロメロになった。それは、3・11後の対応に現れ、公約違反等もあつて国民の信頼を失い、丁半（ちようはん）的な解散・総選挙（第46回）で、衆議院四八〇議席中二九一議席を自民党に占めさせ、自公政権を復活させた。自民党は性懲りもなく安倍を再登場させた。安倍内閣は、国家安全保障会議（日本版NSC）の設置と特定秘密の保護に関する法律を成立（13年12月）させ、武器輸出三原則に代わる防衛装備移転三原則の閣議決定（14年4月）と、「集団的自衛権は行使できる」との閣議決定（7月）で、昨年末には、突然の総選挙を強行、結果は、安倍の思惑通り、戦後最低の投票率で自民党の得票数も減つたのに大勝したとおりである。

安倍は今日、如何に国民を騙して参議院でも改憲発議要件である三分の二の議席を獲得するか、策謀を練つておられると思われる。二〇一六年の参議院選挙である。

新社会党が旗揚げされてから来年で二十年目、いよいよ正念場の年を迎える。是非、国政の場に、真面目に働く勤労国民の代表を送る目標を実現したい。そのためには、未だ準備本部とか準備総支部等の遅れを一掃し、全体が一丸になつて総資本・権力と戦える体勢と体力を整えねばならないのでないだろうか。

先生は、九州大学での教鞭の傍ら、三池炭鉱労働者との交流をはじめ、全国各地の労働者大衆と交流していたことは周知の通りであり、弟子は学者ばかりではない。

先生は、士族の流れを継ぐ明治生まれらしく、「私の遺産はすべて社会主義協会のもの……」などと語っておられたが、今日、蔵書は、法政大学の大原社会問題研究所で一般公開されている。また、鷺宮の屋敷跡は、書庫は題辞もそのまま、他は更地にした上に、二階建ての『法政大学向坂逸郎記念国際交流会館』が建っている。

晩年には、「君らが革命に成功したら、墓石を揺すつてお祝いをしてやる」と語っていた。墓は、先生自身が、町田市の養運寺（浄土宗鶏足山養運寺）に向坂家の墓を建て、今日では、奥様らと共に眠られている。鷺宮の旧邸や大原社研（蔵書）の見学の帰りにでも、墓参されてはいかがであろうか。

当面の、そして長期的な人口問題への対処について

— 人口問題 根本解決への基本視点 (三) —

行政改革

(1) 人間は自分自身の歴史をつくつてきました。前述したように、それは思うままではなく、自分でえらんだ環境のもとではなく、すぐ目の前にある、あたえられた、持越されてきた環境のもとでつくつてきました。では、松本市役所では職場として何をすべきか、自分達は職場で何をすべきかについてです。

私が大学で学んだ憲法学では、「大日本帝国憲法と日本国憲法の大きな違い」として「主権在民・三権分立・平和主義」に加えて「地方自治」が挙げられ、「地方自治は民主主義の学校であり、地方自治体には固有の業務がある。」ということでした。

しかし、一九六〇年代より地方自治体固有の業務である公務労働の市場化も徐々に始まり、一九八一年から始まった第二臨調行革を境に、大規模に実施されてきたと思います。このことは「人口逆ピラミッド社会」形成に大いに拍車をかけたと思います。

当時の自治大学校部長教授坂田時雄氏の『実践地方行革』という行政改革の手引書を一読すればよくわかります。こうした行政改革の現在の到達点が、私の職場的には公立文化施設の指定管理者制度であり、利用料金制の導入なのだと思います。

こうした制度、とりわけ利用料金制は「休まず、遅れず、働かず」とも言われてきた公務労働現場への警鐘でもあったことも認識すべきです。「書類が揃っていて監査に耐えられ、仕事が十分遂行できないでいる理由を上手に言えば万事OK！ 公務員は首にならないから！」などと陰口を叩かれる始末です。

「流動状態にある人間労働力、すなわち人間労働は、価値を形成するのではあるが、価値ではない。」(マルクス著『資本論』岩波文庫版 第一分冊九五頁) ということを知るべきです。しかし、松本市音楽文化ホールにとってこの制度は、実は業務遂行上の大いなる足かせになっています。

少なくとも第二臨調行革(一九八一年)以降、官民を問わず日本中どここの職場でも「仕事の効率化＝機械化と人件費減らし」を「生き残り」をかけて「競争」すること強いられてきたと思います。公務労働現場でも公設民営が原則化されてきましたし、果ては派遣労働者制度の確立です。こうしたこのことの見直しなくして、課題は解決しないでしょう。なぜなら、このような施策の結果としての大きな問題の一つが「人口逆ピラミッド社会」の形成であると考えざるを得ないからです。

ちなみに第二臨調行革が始まるときの「行政改革」の趣旨は「国の当初予算は約四〇兆円、(当時の) 国債発行残高が八〇兆円をも超えるので、この国債残高を減らそう！」というものでした。しかしこの三〇年間「行政改革」をやる度に国債発行残高は膨らみ、いまや当時の一〇倍以上の発行残高をかかえているという現実をどのように考えるべきなのか、これこそ大きな問題です。

私が大学で受けた講義(財政法・財政学)では概(おおむ)ね次のようになります。「昭和一〇年から終戦の二〇年まで戦時国債を発行し続けた結果物価は二〇〇倍にも

跳ね上がった反省から、財政法の四条、五条が作られた。」と。例外規定が作られ、佐藤内閣以来発行され続けられ増加の一途をたどる国債発行残高については、戦後の日本経済財政史の検証をしなくてはならないと思います。

人口逆ピラミッド 当面の解決策

(2) お蔭様をもって、我が職場はこの三年間でプロパー職員を二名増員してもらいました。これは職場としても全く有難いことです。終身雇用ではなく不安定雇用者ではありませんが、正規職員に近い生活を保障できる働き手が増えたということです。しかし、我が職場の人員構成を検証してみますと、まだまだ「人口逆ピラミッド社会」形成に協力していると言わざるを得ない人員配置だと言えます。

市職員 二名（正規職員）

財団職員八名（全員嘱託／内訳 館長一名、プロパー職員三人、一般嘱託職員四名）

委託会社四社（A社／内訳 正規一名、派遣一名、加えて多い日は派遣等が十四名）、

（B社／内訳 正規二名）、（C社／内訳 フルタイムパート三名）、

（D社／内訳 一〇日勤務／月一名）

基本的に一七名が常勤で働いています。市の元大幹部も館長として一名いますが、市の正規職員二名以外は非正規の不安定雇用労働者です。二〇代三〇代の若者が一般嘱託という形で雇用されています。彼らは家族を持てるような処遇ではないと思えますが、しかし委託会社から我が職場に來られている方達より、働く条件は全般的に良いようです。こうした職場実態が問題なのです。日本中どこに行ってもコンビニがあるように、日本中どここの職場に行っても低所得の不安定雇用者を創出することに一生懸命です。人口が逆ピラミッドになって行く原因はここにあります。こうした状況は、行政も率先して創り出してきたと言つて間違いではないでしょう。

音楽用語にも詳しくなく、モーツァルトやベートーヴェンの作品でさえ聞いたことの無い若者が一般嘱託として採用されます。ホールの利用者やコンサートのチケットを求めに來館されるお客さんと、音楽の内容まで含めて応対ができるようになるまでには、一定の時間をかけて訓練されなければなりません。が、せっかく訓練されても、景気の良いときは「職が見つかったので退職させて下さい！」と申し出があり、そうでなければ「はい！ 嘱託の期限切れです。お辞めください！」と言わなくてはなりません。これが「楽都松本」を支えているといわれている職場の実態です。職場を持続可能で、かつ、グレードアップしてゆくためにも、そして人口が逆ピラミッド社会の当面の解決策としても、安定的雇用者の創出は急務だと思えます。

生活の安定と労働日の短縮、これこそ人間の自由度を増し、そして文化が発展するための基盤であることは間違いありません。

商品貨幣経済の止揚 根本解決

(3) 就任以来、菅谷昭市長が何回も職員の前で話されてきたこと「仕事は論理的に！」と言うことです。私の好きな、論理学の書とも言われる古典には前述のように

「課題は解決の手段と同時に発生する。」と記されています。

バブルがはじけて以来、松本市役所の正面玄関には「松本市緊急不況対策本部」に始まり「松本市緊急景気対策本部」等々、そして今は「松本市緊急 経済雇用 生活対策会議」という看板が立てられています。名前は変遷していますが、要するに景気が悪いとはどういう現象でなぜ起こるのか？ ということの理解なくしては、その真の打開策は打ち出せないように思います。この問題の根本的解決なしに、《人口逆ピラミッド社会における行政課題と解決に向けての方策》を立案することも困難でしょう。

私達の生活している現代社会が成立する時の土台となった考え方は「自由・平等・友愛」に代表される啓蒙思想だったことは間違いないでしょう。そして、現代社会の課題を解決する哲学は、ヘーゲルの弁証法を合理的に発展させた弁証法的唯物論だと思えます。「人間が立ち向かうのはいつも自分が解決できる課題だけである。課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに現存しているか、または少なくともそれができはじめている場合に限って発生するものだ。」（マルクス著『経済学批判』岩波文庫版 一四頁）というのです。《人口逆ピラミッド社会における行政課題と解決に向けての方策》という大きな課題は、歴史が必ず解決するでしょう。

「批判の武器はもちろん武器の批判にとって代わることはできず、物質的な力は物質的な力によって倒されねばならぬ。しかし理論もまた、それが大衆をつかむやいなや、物質的な力となる。理論は、それが人間に即して論証をおこなうやいなや、大衆をつかみうるものとなるのであり、理論がラディカルになるやいなや、それは人間に即しての論証となる」（マルクス著『ヘーゲル法哲学批判序説』岩波文庫版 八五頁）という言葉があります。

自治体のどれだけ多くの職員が、まずは目の前の生活している社会がどのような経済的社会構成体であって、どのような経済法則をもって発展しているのかという問題に、意識的に興味をもって本気で勉強することが求められていると思えます。人口減少により存続が危ぶまれる地方自治体が増え続けているというわけですから、自分が生活している自治体の未来を真剣に語るなら、そうすべきです。

そして解決への道のりは困難を極めるでしょう。私たちの多くは啓蒙思想の果たした役割を認めて、その歴史的役割を否定する人は少ないでしょう。しかし、それが広がるのにどのくらいの努力が払われ、かつ時間を要したかを考えてみるべきです。世界には未だに、地動説のガリレオや進化論のダーウインを意識的に受け入れない勢力も大きく存在しているのですから、弁証法的唯物論を人間社会に適用する考え方が広まり、受け入れられるようになるには、気の遠くなるような努力と時間がかかるように思えます。

結論を言いますと「商品貨幣経済の止揚」、理論的には解決されているように思いますが。

おまけ

「私の好きな論理学の書とも言われる古典」について。

『資本論』のことです。レーニンは『哲学ノート』に次のように記しています。

「マルクスは『論理学』に坎する著書をこそ残さなかつたけれども、『資本論』という論理学を残した。われわれはこれを与えられた問題にたいして特に利用すべきであろう。ヘーゲルのうちにあるすべての価値あるものを取り、そしてこの価値あるものをいつそう発展させた唯物論、このような唯物論の論理学、弁証法、および認識論（三つの言葉は必要でない。それらは同じものである）が、『資本論』のうちで、一つの科学に適應されている。」（岩波文庫版 下 一三一〜一三二頁）

財界や企業のトップは、まるで『資本論』をよく研究し、逆手にとって活用しているようにさえ思えます。

（二〇一四年一月二日 中澤 秀行）

◇ドイツND紙の記事Ⅱ 原 八峰訳からの紹介（下）◇

ピケティは何が資本主義かを問わない

彼は何を成し遂げたか、そして何を成し遂げなかったか

なぜ彼は大うけしているのか

ピケティは支配的な経済様式に対しては全く肯定的な立場に立つ。

彼の著書をめぐる熱狂はどこからくるのか？ 同様なテーマに関する多くの研究、書籍、および完全に、より容易にアクセスできるテキストが現れているにもかかわらず、なぜ選りによって彼の本が大うけしているのか？ 同書をめぐる熱狂への説明として、多くの視点が提供されている。

金融および経済危機は、一つには、資本の自由、減税、競争力に関するこれまでのドグマを正当性判定の圧力下に置いた。加えて、厄介な国家財政のゆえに新たな分配問題、すなわち誰が安定化のコストを担うべきかという問題が生じた。二つの論点は政治・経済エリートたちの間に資本所得・資産課税に関する対立した立場をもたらした。さらに加えて、ピケティは民衆の知恵、悪魔はいつも大きな塊の上に糞をする”あるいは”持つものは与えられる”ことを、膨大な統計を駆使して経験的に、また表面上は政治的に中立的に証明している。

こうした点を背景として、ピケティは同時に、傾向的に増大する不平等は単なる偶然ではなく、経済に内在する法則、あるいは少なくとも強力な傾向から生じる不平等である、というテーゼを導き出す。この証言（命題）は、したがって、何故に政治的に軌道修正することが原則的に必要になるかを、さらにまたこれがいかに行われるべきかに関する議論が内包しているものとともに、導き出す。ピケティはこの問題の中でいくつかの提言をした。それはすべての人々、とりわけ負担することになるであろう人々（資産所有者）や、自らの経済政策的教義がこのような税政策的企図と矛盾する人々の気に入るわけにはいかない。

反資本主義ではない

ピケティは確かに支配的な経済形態——資本主義——を把握しているが、しかし反資本主義的には論じていない。

第一に、彼の「分配法則」は、彼にあっては、資本主義（加えて彼はそれを概念的にいいままにした）においてだけでなく、いかなる経済形態にあっても適用される。増大する不平等は彼にあっては富そのものの法則であって、富の特殊資本主義の形態のそれではない。

第二に、彼の政治的要求は基本的なシステム転換を目的とはしておらず（転換には至らず）、資本主義を安定化するであろう税制上の若干の変更を目的としている（変更に至る）だけである。ピケティの巨大な建設的資本主義批判は彼を支配的な危機論争へ接続可能にしている。

マルクスはもとより、ケインズにも比肩できない

ピケティがなしたものは何か、なさなかったものは何か？ 彼の状況批判はどのような射ているか？ そして『21世紀の資本論』もまたいかなる現行のイデオロギ―を担っているのか？

彼は彼の認識を、すでに見たように、膨大な統計資料に依拠する。彼は理論家としてよりも、いわば数字にもを言わせる中立的な統計学者として振舞っている。とりわけ彼の分かりやすい公式 $r < g$ （資本収益率は経済成長率よりも大きい）は統計指標以外のものではない。

しかしながら数字はそれが意味すべきことを決して自らは語らない。そのことはピケティの本にも当てはまる。その基礎には総合的な経済現象の一定の解釈がある。すなわち、大学や教科書を支配しているいわゆるネオクラシック（新古典派）によれば、市場の自由な力が均衡へ傾斜していく。このことが、経済学のメインストリーム（主流）によれば、社会的な最善の状態、可能な限り最大の欲望充足状態を意味する。彼によって分析（評価）された統計資料がそれに矛盾することを、ピケティは知り尽くしているが、しかしそこから理論的な帰結を引き出さない。

したがってピケティは、彼自身が強調して止まないように、理論的にはマルクスに比肩することができないのみならず、少なくとも新古典派の主流の理論的基礎との決別を実行したケインズとも決して比肩し得ない。

封建主義と資本主義の区別もなく

「資本収益率（ r ）は経済成長率（ g ）よりも大きい」は常に妥当する、封建主義においても資本主義におけると同様に。しかしまさにこの、資産のそれぞれに特殊な、社会的性格に対する視野の狭さと無頓着は、ピケティが確かに不平等の動向（発展）を歴史的にたどることができたとしても、しかし常に、彼にとつて「単一に存在する」すでに前提とされた不平等の上だけをなぞっているに過ぎない、という結果をもたらす。

ピケティは確かにマルクスに媚を売るが、しかし本気でそれを心に留めよう（学ぼうと）としないので、彼からいくつかのものが失われる——そして確かにその本質的なもの、彼が本来解明しようとするものが失われる。ピケティにあっては資産が一樣なるものであるように、不平等も一樣である。したがって彼は限定的に啓発された、

すなわち市民的視野の中で行動する。ピケティといえども同意するであろうが、資本主義の前に不平等は神によって与えられたように見え、それ（不平等）は、人間は決して平等ではなかったという「自然的」社会秩序に相当した。

資産はどこから生まれるか

「啓蒙された」社会においては、これとは反対にそのようなことを正当と認定するモデルを持つことは難しい。しかしながらその位置には、とりわけ市民的理論の偉大なる頭脳——ピケティもその一人——によって特徴付けられる他の人々が取って代わった。いわば労働が、所有物（富）の、したがって資産の基礎を創る——ということ は規範であるし、「一般法則」（マルクス）であると思なされる。この定理は、それ以降今日まで経済理論においてだけでなく、日常的な理解（判断）においても深く根をおろしている——たとえ矛盾がないわけではないにもかかわらず。

不平等の発生源が不明のままに

不平等は一方ではさまざまな労働実績によつてのみ説明でき、従つて労働実績によつてのみ正当性が証明できるように見える。他方では、現実はそうでないことを示している。これが、なぜピケティが堂々巡りをしているのかの背景である。すなわち彼は、不平等はそれが存在しているがゆえに増大するのだと論ずる。

彼は、そもそもいかにして「原初的な」不平等が世に現われ、どのような社会的に特殊な不平等——直接的な生産者の、客観的な生産能力からの切り離し——が資本主義を際立たせているかを説明することなく、堂々巡りの議論をしている。従つてピケティは、資本主義における不平等がいかに発生し、持続するかの方法に関しては、注目に値するほどにほとんど語っていない。

われわれに何が必要か（編者あとがき）

以上から分るとおり、マルクスの母国では流石（さすが）に評価は高くない。簡単には本誌元旦号でも批判しておいたように、社民主義的な対症療法の域を越えてはいない。われわれがこのような高い本を買う必要は毛頭ない。

世界的によく宣伝され売れているのは、貧困や格差拡大が今や資本家階級やそのイデオログからさえ無視できないほど深刻になり、この本に資本主義的な解決策はないか、労・資双方に好都合な道はないかと期待を寄せるからである。

ピケティによると、マルクスは資本主義自体が足元を掘り崩されて自壊するか、労働者による共産主義革命が起きるかしかなくなるという終末論的な理論を提唱しているという。しかしマルクスが書いてある通りに読めば、資本主義的蓄積の基本的法則として、「窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが」またその反作用として「訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も増大」して、早晚「収奪者が収奪される」のであって、これは資本主義の自壊でもなければ、人間社会の終末論でもない。「否定の否定」（『資本論』向坂逸郎訳、岩波文庫版③四一五頁）による弁証法的発展であり、人類社会の飛躍的進歩である。

我々にとって必要なことは、もっともっと多くの労働者とともに、窮乏化の法則的作用を生む根源に迫って、労働者階級を解放する科学的な理論をマルクス・エンゲルスの書から、そして二人を血肉として日本に適用した山川・向坂の著作から学びながら、正確な高い目標を持って闘いを広げることである。

(原野人編)

仲間を支える態勢、そして覚悟

―「福本裁判」の教訓―

兵庫の福本さん、Iさんが参加されていて、福本さんの裁判報告の中途からの例会参加となりました。日本郵便非正規ユニオン委員長の福本慶一さんと、仲間のIさん。福本さんは、一回三〇分の遅刻で、基礎評価額の一〇円と、資格給の二〇〇円を下げられたことを不当として一年四カ月の間、裁判で争い昨年八月に勝利的和解を得た方。

報告を聞きながら取ったメモで印象的だったものをいくつか紹介します。「裁判闘争を闘っても非正規ユニオンの組織が増えていない。それでも突破口になる」、「和解を新聞報道されたことで『やつと』」、「大阪のS局との交流、非正規社員の思いや悩みはどの局も同じ」、「判決である程度の差は仕方ないと書かれる。訴訟の限界」、「上がるときは二一〇円、下げるのは一〇〇円に。会社も違法性認識。しかし小手先」。

これらを振り返って思うのは組織が増えていないという現状も、勝利的和解という事も同じで、「運動はゼロか百かということではない」という事を意識させられました。闘いに勝つ事に拘(こだわ)ることは大事で全力を尽くすと同時に、表面的なモノ以外のモノに目を向けているという事だろうと思うのです。

勝利的和解をした一方で「訴訟の限界」、また評価制度の変更についても、「改善はされたが小手先」と評価しています。自分達がなにを最終的に目指すのかという事が無いと、このような総括は出てこないだろうし、その為に組織強化・仲間の成長変化・社会的波及等、多種多様な問題意識をもって討論され、闘争が取組まれたのだろうと思います。話には出ていませんでしたが組織数が増えていなくとも職場の仲間の変化を生み出されたり、変化するきっかけになったりという事があるかもしれないし、逆に全く反動があるかもしれない。それらも掴む機会も闘ったからこそ得ることが出来たのだろうし、それを現状として次をどうするかという事が議論できる素地になるんだろうと思います。またS局との交流では自分たちの思いは特別なものか一般的なものかを知る指針になるであろうし、常識に押し込まれた「働く者の実態や思い」を明らかにしていくこと、それが私たちの運動の指針を与えたり力になっていく事だとも思います。単に勝った・負けたの報告ではなく、考えさせられるとても中身の濃い報告を聞かせていただきました。

その後いくつかの意見ができました。大阪の非正規雇用で働くKさんはいろんな人から「非正規ユニオンをつくれ」と言われています。そのKさんは「現状を打破したいが、どうすれば？」と身の振り方を考えることが多い、「非正規の事が自分達で動かさないとよくならない」、「自分達で動かすにはどうすればよい?」、「若い人は従

順」と言われる」と話していました。

またＴさんは「自分は非正規出身。見守る人が必要だがそういう正規はなかなかない」、「非正規ではなかなか闘えない」と意見をだされてきました。またベテランの参加者からはＫさんに「仲間を作らないといけない。ＪＰの役員をすればどうか」、「職場の問題を闘う事で仲間が出来ていく」等言われていました。兵庫のお二人に大阪からの意見をどう感じたかを問うと、「地域ユニオン・人・タイミングが合った。非正規ユニオンを続けられるかという五年」、「前職はもつとひどい職場。郵便局に救われた。だから長く働きたい」、「小さいけれど希望をもって、誰かがやれば」と答えておられました。

働き続けるには組合活動ではなく労働運動が、また仲間に決意をさせるには「〇〇さん頑張れ」ではなくて、その仲間を支える体制や覚悟が必要という事を改めて確認できました。自分自身一度は職場の仲間に失望し労組役員を辞めました。運動を投げ出そうとした経験があります。たとえ投げ出しても働き続けるには、仲間に働きかけ運動をつくるしかないという事実は消えません。役員を辞めたその後、自分の職場は大変な合理化が行われました。その環境変化も手伝って何人かからはいろいろな思いを話してもらえるようになっていきます。ただそれは「ここだけの話で誰にも言わないでください」といったもので、「変える為に一緒に何かをしよう」とはなりません。

結集軸を作る為にも、自分自身も労組役員に戻って戦線の一角を担う事が必要だし、また戻るためにも職場の仲間の思いに目を向け、耳を傾け、自分の思いを話し、闘う土台作りをしていきます。

（『大阪郵政労運研ニュース』二〇一五年一月八日 第四六号）

◇ 読者からのおたより ◇

節目の年 来年は、震災・非核神戸方式・戦災の、それぞれの年になります。この年に、私たちは、あらためて「いのち」の大切さを考え、「平和」の尊さを考える機会を得ます。しかし、国は、それとは全く反対の方向に今、進もうとしています。今回の選挙結果は、ご存知のように安倍自民党政権が大きく議席を伸ばしました。この国民の選択は、残念ながら「自分で自分の首を絞める」ことにつながっていきます。安倍政権は、国民の「信」を得たとし、我が物顔に普天間基地移設をはじめ、原発再稼働、集団的自衛権行使、消費税率引き上げ等々を乗り切ってきます。私たちの力不足で「小選挙区制度」を許してしまったことが今更ながら悔やまれてなりません。

しかし、諦めるわけにはいきません。あるだけの力を振り絞って、この危険な流れを止めていかなければなりません。まずは、統一地方選挙です。大変厳しい情勢のなか、小さな一議席ですが、「希望」を持って四期目を目指します。

（神戸市議会議員 小林 るみ子）

（神戸市議会議員 小林 るみ子）

退職金制度をめぐって 知人が以前に勤務していた企業で、退職金制度を廃止するという事になり、その説明（会社としては決定事項として）話に来たようですが、その知人と数名が「何故？、いやだなく！」と言うと、反対をした人達だけ後日集められて偉い人が来て、食事を取りながら説明会をしたそうです。三十名近くいた労働者の中で不満を言った六名ほどの人達だけはちよつと得をしたみたいで、「いや〜言ってみるもんだわ！」と言っていました。

しかし、この説明に来たのは実は労働組合の役員だそうで、この企業の労働組合は会社の言いなりの組合で、会社の言うことは全て取り入れてるので、労働者の為に動くことは無いようです。我が労働組合は違います。

編集部より

（みんな）二〇一四年一月一九日No.七五二六）

要求、不満の発言こそ、次への闘いの一歩です。

「辺野古の現場から」31号(15・01・12) 問答無用の強行―辺野古・深夜の資材搬入これほど露骨な民意無視、自治権侵害を許せるのか。上京した翁長知事とは会談を拒否し交付金を減額する一方で、辺野古工事関係の補正予算は大幅増。15日からの海上工事再開に向けて、沖縄側とは一切の話し合いも通告もないまま、10日深夜から11日未明という通常ではありえない時間帯に大量の工事資材の搬入が続き、阻止行動参加者からは逮捕者も出た。県知事選と続く総選挙、民意は誰が見ても辺野古NOだ。実力阻止行動は当然の権利であり、義務ですらあるだろう。以下写真説明です。
*写真①辺野古1月10日の攻防―ゲート前に列をなす工事車両、*写真②③―辺野古1月11日未明の攻防、③琉球新報より、④沖縄タイムスより、*写真④―1月12日早朝からゲートを封鎖「1台も通させない!」(毛利孝雄)

高開さん 今朝の東京新聞の特報部のデスクメモは、高開さんが登場してくれて嬉しい事でした。よき自治体議員や首長を勝ち取ってきたことにも、寄与しているように思います。彼女が全国の党を引っ張ってくれることを期待しています。

編集部より 私は見落としていました。

楽しみたい 安倍政権との闘いを楽しみたいものです。

編集部より 安倍の経済政策は、消費税増税の先延ばしが象徴していますが、すべてが失敗。しかし、労働者階級が眠らされている。

残金カンパ おそくなり申しわけなし。一年分です。残りはカンパします。(千葉・S)

編集部より カンパに感謝。勉強会、楽しみにしています。

お願い 半年前はいろいろ配慮された上でのことだと思いますが、現場の実態を知ってもらうためにも「A労組」ではなく、正直に「国労」と記してもらいたかったです。(東京・S)

編集部より 配慮無用だったようですね。ごめんなさい。

「組織力は力」だが どうも組織が人を殺しているようにも思います。「組織は力」のほずですが。

編集部より 人間を育てる作風が失われてしまいました。組織が小さくなったからかも知れませ

ん。

搾取 資本主義は労働者が搾取されるという内在的矛盾によって、階級対立は激化し、労働者階級に窮乏化(生存の不安定さ)を押し付けて発展する社会である。今後四年間、自公政権のなりふりかまわぬ反動政策は、この事実を多くの国民に反面教師として教えてくれる。この反撃の条件を活かすためには、日々の学習と実践を積み重ねるしかない。今年も情勢分析の指針をよろしく願います。(北海道・S)

編集部より おっしゃるとおり。この気迫、私もただです。

覚悟 松下竜一忌で出会うことができた言葉。「自分の中の絶望との闘いだ」と覚悟すること。崩れかけた時は『覚悟はあるか』と自分を叱咤する。この言葉を、できればさわやかに。(大分・K)

編集部より ズシンとくる言葉。

平和 第九条 広島・長崎 永遠に記憶/戦争放棄 軍隊不保持 お身体に気をつけてください。

編集部より いろいろお気づかいに感謝です。(札幌・松里 福慈)

出向 お元氣ですか? 五月からステーション・サービスに出向します。JR内の問題は多くありますが、職場から解決に努めます。JR内の問題は多くあります。(神奈川・A)

編集部より くれぐれも健康第一、お身体をいたわることお忘れなく。

読書 『帝国主義論』(レーニン)、『永遠に生きる思想』(向坂逸郎)をくり返し読んでいます。

編集部より さすが「憲ちゃん」。私めの読書も殆ど古典。たまに新刊買う時も。感想寄せて。(大分・佐藤憲一)

どうなる J P 労組、分會体制なかなか確立できず、参院選どうなることや。感想寄せて。(J P 労組・T)

編集部より J P 労組、機関紙やニュースを目を通すかぎり、組合員の心はつかめない。

ふるさと 山があり 川が流れ 水が湧き 滝をつくる 人がいて 思いがあり 集いが生まれ 輪をつくる (福井・黒崎 隆雄)

編集部より じっくり ゆっくり 深く考え 実践に移してゆきたい。

「イクサヤ ナランドー」 昨年は激動の年でした。沖縄とは何か。権力とは何か。あえていえば、日本政府から見下した沖縄とは何かを考えさせられました。しかし、戦争体験者の方々には「イクサヤ ナランドー」。世界戦争は何としても止めるという声がありました。(沖縄・S)